

2018年  
か ぜ ひ か

# 風光れ

人権のたより 第5号 9月10日発行

三重県立津東高等学校

豪雨・台風・酷暑・地震・・・とても胸の痛い出来事が多いですね。北海道の地滑りで家屋がつぶれて呆然と立ち尽くす男性の姿が目には焼き付いています。「自然を恨んではない、この故郷で生きていく」と、自然のなせる技として受け入れている姿に涙が流れます。

そして9月になって忘れられないのが、2001年9月11日のアメリカ同時多発テロです。何か映画を見ているような感覚で、テレビを見ていたのを思い出します。

テロの犠牲者達をしのぶ追悼集会が、事件の1年後（2002年9月11日）に開催されました。そこで、遺族である一人の少女が“Do not stand at my grave・・・”と始まる詩を朗読しました。それが『千の風になって』という歌です。

その歌の歌詞をご紹介します。

私のお墓の前で 泣かないでください

千の風に 千の風になって

秋には光になって 畑にふりそそぐ

朝は鳥になって あなたを目覚めさせる

私のお墓の前で 泣かないでください

千の風に 千の風になって

（2行くりかえし）

そこに私はいません 眠ってなんかいません

あの大きな空を 吹き渡っています

冬はダイヤモンドのように きらめく雪になる

夜は星になって あなたを見守る

そこに私はいません 死んでなんかいません

あの大きな空を 吹き渡っています



私は最初にこの歌を聞いたときに、歌詞の最初の言葉、『私のお墓の前で 泣かないでください。そこに私はいません』がとても印象的に感じました。皆さんはどうでしょうか？『そこに私はいない』と言うのならお墓は要らないと思いますか？

私も墓参りはします。両親先祖に対して挨拶に行きます。まさにお礼と感謝でしょうか。私は友人から「人というのは二度死ぬんです。1回は肉体が亡くなったとき、そしてもう一度は人々から忘れ去られたとき」と。

私は、お墓があることによって、あなたが先祖に感謝するように、あなた方の子孫はきっとあなたに感謝するに違いない、と思うのです。

あなたが亡くなったあと数年間、あるいは長くて10年・20年間は、残された人たちは、風や鳥の声の中に『あなた』を感じることでしょう。

しかしそれより長くはまず無理です。50年・100年後の子孫は、お墓の前でこそ、あなたを思い、感慨にふけることでしょう。おそらくは幸せそうに笑いながら…。命のつながりを感じます。あなた方が生まれた歳と重ね合わせて・・・